

---

# ハンターライフ～アナザー・ストーリー～

リオ・レウス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハンターライフ アナザー・ストーリー

### 【Nコード】

N7285E

### 【作者名】

リオ・レウス

### 【あらすじ】

どこにでもいる普通の中学生の翔平はある日不思議な夢を見る。それがきっかけで翔平は異世界に飛ばされてしまう。

## 第一章「プロローグ」

どこかも分らないような雪山

辺りは白かった。とても白かった。何も聞こえない。何も感じない。そんな中、一人の少女が歩いていく。まるで何かを探しているかのように。

…とてもしずかだった。

少女の顔はよく見えない。霧がかかったような、そんな感じだ。少女がふと立ち止まった。

辺りを見渡す少女、

ふと少女の視線が一点に集中する。

その先には何かがいた。

全身が黄色に近い色でおおわれ、しなやかな尻尾が伸び、そしてトカゲのような頭を持つ生物…

「グオオオオオオオ！」

鋭い目を少女にむけ、その生物は大きくほえた。

少女はうれしそうに何かをつぶやいた。

そして少女は背中にかけていた大きな剣を取り出し構えた。

「グオオオオオ！」

その生物がもう一度ほえた…次の瞬間その生物は地上からきえた。空へと大きく舞ったその生物はまっすぐ少女の方へとつつこんでいく…

…危ない…

## 第二章「世界への扉」

『朝ダヨ！朝ダヨ！起きてチヨード！イ！…』

録音式の目覚まし時計から、この前録音された翔平の声が部屋中に鳴り響く。

翔平は渋々ベッドから起きあがり、目覚ましから鳴り響くふざけた音声を止めた。

「ん…夢か…」

翔平は目をこすりながら起きあがった。

時計はぴったり7時を指している。

学校には充分間に合う時間だ。

「…」

翔平はしばらくベッドの上でボーとしていた。

なんだろうな、この感覚…

なんか胸の奥がモヤモヤする。

おつかしいな…コレ、目覚めわりい…

…きつと夢のせいだよな？うん、多分そうだ。

そんなことを考えながら着替えをすませ、翔平は下に降りていった。

そして登校。

翔平はいつも、親友の駿とコンビで待ち合わせをしている。

駿はいつも集合時間には来ない。

いつも遅れてくる。

「おっせーな駿のヤツ……」

「よお！遅れちった！」

しばらくして駿が来た。いつも通り、遅刻。

「遅い！15分遅刻！」

「いやー朝飯食いながら二度寝しちゃってさあ…」

いつも通り、いいわけを並べる駿の顔にはまったくと言っていいほど反省の色がない。

まあコレもいつものことだ。

「さっ！ー！楽しい学校 楽しい学校 今日はいいいことありそうだななか、美少女が転校してきそうな気がする」

なぜか今日の駿はテンションが高い。

「なんだなんだ！？やけにテンション高いじゃん？」

翔平が何気なく聞くと、駿は笑いながら答えた。

「昨日夢見たんだ 変な恐竜みたいなのが出てくる夢」

マジか！？こりや偶然！俺の夢にもそんな感じのヤツ出てきたじゃん！

「いや偶然だな俺も見たよ、恐竜みたいなヤツが出てくる夢！？」  
少し興奮気味に翔平が言った。

「ハッ！俺の夢の方がすごいもんね〜だ。こっちは女の子が出てきたぜ！？」

え…？女の子？確か、俺の夢にも少女が…

「しかもサ、その女の子が恐竜みたいなのと戦ってたぜ！？かつこよかったな〜」

え？えええ？…

「それでサ、雪山が背景でさ、その女の子がよけいに引き立ってね〜。アレは惚れるよ…」

「え、えええええええええ！??」

翔平は思わず声に出してしまった。

「それ俺の見た夢と同じじゃんか！ー！」

「え……」

駿は驚愕の表情を見せた。…というよりもう放心状態に近い状態になってしまった。

そんなに驚くことかよ…

間。

「…で、でもサ、その女の子の顔、翔平は見たのかよ？」

「え？見てないけど？…」

「じゃあ俺の勝ちだな。俺、その子の顔見たもん！」

（……そうですかい。てか、競うことか？）

キンコンカンコン…

遠くから学校のチャイムが聞こえた。

「やっべー！！遅刻だ！！」

「遅刻したら廊下に立たされる！！」

2人は全速力でダッシュした。

信号が赤に変わる。二人はそれに気付かず、駆け抜ける。

不意に大型トラックが交差点を直進してきた。

「え…」

キイイイイ！！

車のブレーキ音が鳴り響き、翔平の意識が途切れた。

### 第三章「渡り」

（俺は……？）

「あ、気付いた。ダイジョブですか？」

（…誰だ？…駿は？…俺は…どうなったんだ？）

翔平はゆっくりと目を開いた。

隣で翔平と同じくらいの年齢の少女が心配そうにのぞき込んでいた。

翔平はビクツと起きあがった。

「だいじょうぶですか？」

「え…まあ大丈夫だけど…君だれ？」

「あ、私『レイ』っていいいます。あの、あなたが倒れてるのを見つけて、それで…」

ここはどこだろ？

翔平は辺りを見回した。

何もない……あるのは小さなたき火と何かの荷物だけだ。

よく見ると周りは岩はだしが見えない。

どうやらここは洞窟のようだ。

「…って、寒ッ！寒い！」

翔平は震え上がった。

よく考えてみると相当寒い。まるで雪山だ。

「あ、コレ、着てください。」

レイが分厚いコートをさしだした。

「あ、ありがと。」

間。

（ん…えっと…俺は学校に行く途中だったよな？ココどこだろ？）

レイは何か言いたそうに翔平を見つめている。

（そうだ！！これは夢だ！！そうだよ、こんなの夢に決まってる！  
！昨日のみたいに夢だ。きつと……）

翔平は自分の頬を思いっきりつねった。（いてててて！！）  
頬に激痛が走る。

あまりの痛さに顔をしかめながら、翔平は夢でないことを悟った。

「あの、何してるんですか？」

翔平の動作を不思議そうに見つめるレイ。

かすかに笑っている。

ヤベ、俺キチガイに見えちゃうじゃん！？

翔平は慌てて誤魔化そうと努めた。

「ん……えっと……これからどうするの？……えゝ今から？」



## 第四章「戦闘」

「どうするんですか？えっと…私、とりあえず依頼受けてるから、それを片づけないと。」

「依頼？依頼ってなんの依頼？」

レイは困った表情を見せた。

「…ハンターの依頼ですけど？知らないんですか？ハンター」

「えーと？…何それ？」

どうやらレイの話によると、ここは元の世界ではないらしい。この世界では様々なモンスターたちが独自の生態をつくり、あらゆる場所で行き来しているというのだ。

そして、人間もそれらの生物と共存して生きる世界。

ハンターというのはおもに、町や村をモンスター達から守る仕事を職業とする人々らしい。

それがハンター。レイもその中の一人らしい。

「とはいってもまだまだ新米なんですけどね！私、もっと強くなつて父の敵を討つためにハンターになったんです。だから、もっと強くななくちゃいけないんです。」

話をしている間、レイは表情一つ変えずに明るく話していた。

しかし翔平には彼女が抱える悲しみのような雰囲気がかすかに感じとった。

どうやらレイの父親はモンスターとの戦闘で亡くなっただけらしい。

「あ、こんな話してる場合じゃなかった！」

レイは急に時計らしい物を取り出して見た。

「ここを急いで出ましよう、…えーと、」

「翔平だよ。」

「翔平さん、私についてきてください。」  
そういつていきなりレイは走り出した。  
翔平は黙ってレイの後を追った。

### 洞窟の外。

外は猛吹雪だった。20メートルほど先も見えないほどだ。  
レイからもらったこのコートを着ていなかったら1分も保たないだろう。

「……………」

レイは無言で何かを探している。

翔平にはレイが何を探しているのか、全く分からなかった。  
と、そのとき、

「ギャオオオオオオオオオオ！！」

大きな咆吼とともに大きな獣が現れた。

獣はとても白く、マントヒヒによく似た外見をしていた。しかし、  
ふつうのそれとは比べものにならないほどでかい。

レイは背中にかけてある大きな大剣を引き抜き、そして構えた。

「ハアアアア！！」

レイは大きく叫びながらその大剣をその獣めがけて振り下ろした。  
すごい力だ。いったいあの体のどこからこんな力が出てくるのか、  
不思議だった。

……が、レイの放ったこん身の一撃は獣の手によつてはじかれた。  
しかしレイは驚きもせず、すでに次の一撃を放っていた。  
さすがにその一撃には獣も反応しきれなかった。

獣の足から赤い血が吹き出す。レイは頬に返り血をあびた。

「グウウウウオオオオオ！！！！」

獣はレイから後ずさった。

「コレが…ハンターなのか…！？」

翔平は面食らった。

あんなに、ただ普通のカワイイ少女が、こんな怪物と対峙している。壮絶な戦闘を繰り広げるレイがなぜかとても大きく見えた。なんて職業なんだ！ハンターってのは！

と、そのとき獣が翔平の存在に気付いた。

（！！！！）

獣は新しい獲物を見つけたと言わんばかりに猛スピードで襲いかかってきた。

「う、うああああ！」

翔平は叫んだ。

……ドゴオオン！！……

何かが爆発するような轟音が崖の上の方から鳴り響いた。

次の瞬間、獣の体の横で何かが破裂し、獣の体が空中で吹き飛んだ。獣の脇腹から血が大量に噴き出す。……何が起ったのか。

翔平は音が聞こえた方向を見た。

そこには誰かがいた。格好からしてレイとは別のハンター。

ここからではよく見えないが、どうやら男性のようだ

そしてそのハンターの手には筒が握られていた。

かすかに笑みを浮かべている彼の持つ筒からは、かすかに煙が出ていた。

飛び道具だろうか。

「ッ！アノンのヤツ……」

レイが舌打ちしてそうつぶやいた。

獣は相当ダメージを受けたらしい……ほとんど動けない状態だ。……

かなり弱っている。

レイは弱った獣の方へ静かな足取りで近づいていく。

とどめを刺す気だろう。

「オイ待てよ。致命傷を負わせたのは俺だぜ!？」

後方から声がした。

さっきまで崖の上にいたハンターだ。

「俺がとどめさすのが妥当だろ? レイさんよ。」

そのハンターは無理矢理レイと獣の間に入って、筒を獣に向けた。

「やめてアノン。あなたでは失礼だわ。あなたにはモンスターに対する敬意が足りないのよ、アノン」

「ケッ、偉そうに!」

「グオオ…グオオ…」

「ごめんね…悪いけれど、これが仕事なんです……」

そう言っレレイは苦しみに悶える獣にとどめをさした。

## 第五章「仲間」

依頼が終了して数時間後。

翔平、レイ、アノンは気球に乗って、村に向かっていた。

レイは目をつぶっている。

しかし、寝ているのかは分からない。

機嫌悪そうな顔をしている。

見たところ、おそらく原因はアノンだろう。

レイは、なぜかは知らないがアノンを嫌っているようだった。

「んと…レイ？起きてる？」

翔平が静かな声でレイを呼んだ。

「…なんですか？」

レイは起きていた。が、まだ機嫌が悪い顔をしている。

「えっと…何でレイはアノンさんと仲悪いの？なんかあるわけ？」

翔平はできるだけ小声で聞いた。

「聞こえてんだよ。お前、本人の前でこそそと話すんじゃないよ。」

「

聞こえていた。まあ狭い気球の中じゃ聞こえるのもムリないが。

「いいじゃない、別に。私はあんたのことが嫌いなんだから。」

「オイオイ、そりゃネエだろ？同じチームメイトじゃねえか。」

「ハア…なんであんなかとかくんじゃったのかな。人生最大の失敗かもね。」

とまあ口げんかになってしまった。

でもこのやりとりで翔平は大体分かった。

（この人達、理屈とかそんなじゃなくて、ただ生まれつき相性が悪いだけなのか…）

「あ、そうだ。翔平君？」

二人の口げんかが一段落ついたところで、レイが話しかけてきた。

「ハンターになるうよ！一緒に！ね！？」

「え？」

いきなりの誘いに翔平は戸惑った。

「私ね、一目見たときから思ってたの。この人、素質ある！ってね。」

「

何か、翔平はうち解けてきたのを感じた。

だんだんレイの明るい一面が見えてきた。

「だから、ね！？村に着いたら、申し込んであげるから！ハンター申請書。わかった？」

「え、あ、うん……」

半ば強引に同意をとられた。

「ケツ！なんでソイツばかり！俺なんかハンター申請書出してもらうまで半年もかかったんだぜ！？」

「アンタはうるさいよ！翔平君はアンタとは違うの。」

（そいえば、あの夢に出てきた少女、ハンターっぽかったような……）

再び始まった口げんかを聞きながら翔平はそんなことを思っていた。

## 第六章「武器選び」

次の日の朝。

一晩かけて、やっと村に着いた。

そして村についてすぐ、というか村について2時間後にはハンターの認証書というモノが届いた。

普通、ハンター申請書を出すと、ギルドという組織が審査、審査をパスした者のみがハンターに認められるらしい。

しかし、なぜかレイにはコネがあつて、レイの推薦のおかげですんなり審査を通つたらしい。

ちなみにギルドというのは、事実上ハンターを統轄する組織である。依頼はすべて（違法のものはのぞく）ギルドを通してハンターに与えられる。

だから、ハンターになるにはギルドの審査を通すというわけだ。

そして今、3人で武器屋の前に立っている。

正式にハンターになつた翔平の武器を選びに来たのだが…

「翔平君、やつぱり、あなたには大剣が向いてるわ！私と同じ大剣を使おうよ！」

「いやいや、ボウガンが最高の武器だよ。遠距離から仲間を支援する心強い武器だ。一緒にボウガンを使って暴れようぜ！」

「いやいや、翔平君、ボウガンなんてかつこわるいよ？遠くからだ撃つてるなんて臆病者じゃない。」

「なにおう！！大剣だつて無鉄砲に突っ込んで、後先考えずにやるバクチじゃねえか！」

「うるさいわよ！わかつた口聞かないで。アノンのくせに！翔平君

は大剣使いに向いているのよ！？ボウガンなんてクズよ！」

相変わらず、あの二人は仲が悪い。

というか、翔平にはどんな武器があつてどんな武器がいいのか、全く知らなかった。

自分には何が向いているのか、何が合っているのか、判断材料がないのだ。

翔平が何の武器にするかずっと迷っていると、武器職人の人が話しかけてきた。

「決まらないんなら、実際に見てみるかい？」

「あ、ハイ。スミマセン」

何気なく返事して、ケンカしている二人をよそに翔平は武器工房の中に入ってしまった。



## 第七章「相棒」

工房の中は鉄くさかった。

そこに武器職人の人がいくつかの武器を持ってきた。

「コレが武器だ。いろんな種類があるぞ？」

翔平は並べられた武器を一つ一つ入念に見た。

武器を選び間違つて命を落としたハンターもたくさんいると聞いたからだ。

慎重に、そして本当に自分に合う武器を選ばなくてはならない。

翔平が迷っていると、職人の人が助言をくれた。

「俺が見たところ、君には片手剣が合っていると思うんだが…」

「片手剣？」

「そう、片手剣だ。剣は片手、もう片方は盾、一番バランスのいい武器だ。」

「はあ…」

「君には片寄った性能の武器は合わないと思うんだ。」

長年この職に就いている職人さんの言うことだから、と翔平は思いきつて片手剣使いになることを決めた。

「それじゃあ片手剣にします。」

「あいよ。わかった。夜までには届けるよ。」

「ハイ。」

翔平は職人さんに礼を言つて工房を出た。

外では、レイとアノン待っていた。

「で、なんの武器にしたの？やっぱり大剣！？」

「いやいや、ボウガンだよな？」

「いや、片手剣にした。」  
「……………」

間。

そのときの二人の表情は口では言い表せないようなモノだった。  
微妙な表情をされて、翔平は少し困惑してしまった。

そして夜。

翔平の初めての相棒、ハンターカリंगाが届いた。  
鍛えられた刃は黒光りして、鋭かった。

そして盾も小さくはあるが、頑丈で軽かった。

「新しい新米ハンターにかんぱーい!!」

集会所でハンターカリंगाを囲み三人で祝杯を挙げた。

「おめでとー翔平くん!これでやっと私たちの仲間ね。」

「これからは俺たちとハンターとしてガンバローぜ!」

「う、うん…」

(そいえば俺、これからどうしよ…どうやったら元の世界に帰れるんだ?)

翔平は心の中でそんなことを考えていた。

「で、明日は翔平クンの練習もかねて、ランポスを狩りに行こうと思いまゝす」

「おう!いいな、いつちよ狩りに行くか、ランポス!」

ランポス!?なんだよそれ?こっち来たばかりでわかんねえ。  
聞くか。

「んゝ…ランポスって何?もしかして、でかいモンスター?」

「いや、小型肉食竜だよ。群れで狩りをするモンスター。おおきさは私たちより少し小さいくらい。」

うん、それなら安心だ。

翔平は自分でも充分倒せると判断した。

「じゃあOK」

軽く返事をして、翔平は家に帰った。

とは言っても家に行くのは初めてだ。

家はギルドの援助で、ハンターに与えられる。  
つくづくいい職だ、ハンターというのは。

翔平は家に着くなりベッドに転がり込んだ。  
天井を見上げながらしばらく黙っていた。

「これから新しい生活が始まるんだな…」  
そうつぶやいて、翔平は目をつぶった。

明日の狩りをイメージしながら…

## 第八章：訓練所編「序章」

次の日の朝。

なぜか今日は早く起きられた。いつもは目覚ましがないと延々と眠っている翔平だが、なぜか今日だけは自然に起きられた。やはり今日の狩りにワクワクしているからだろう。

起きてすぐ防具を身につけ、新しい相棒のハンターカリングを持った。

「よっしゃ、準備満タン。出発！」

と、気合いを入れてドアの取っ手に手を掛けた。

…そのとき！

バン！！

ドアが外から勢いよく押し開けられ、翔平は鼻を強打した。

「べふああ」

翔平は鼻を押さえて倒れ込んだ。

「いつつてえええ〜！」

痛さに転げ回る翔平。

「ん？何をしているのだ？お前！？」

翔平にはドアを開けた人物の影しか見えない。

翔平は痛みをこらえて立ちあがり、その人物を見た。

ドアの前に立っていたのは一人の中年の男性だった。格好からしてハンターであろう。

「ん？、まさかお前がうわさの新米ハンターか？…」

なんだ？このおっさんは…

「…そ、そうですけど…」

「ガハハハハ！やはりそうか、ちよつと付き合え。」

「え？」

そう言つて中年のハンターは、翔平を担ぎ上げた。

「え、ま、ちよつとお！何するんですか！？」

「ガハハハ！心配するな！ちよつと来てもらえればいいんだ」

翔平はパニックした。

な、何者だよ？このオヤジ！！

そこへ、レイとアノンが来た。

ナイスタイミィング！！

「レイ！アノン！助けてくれえ！」

翔平は無我夢中で叫んだ。

「翔平君！？」

お、気付いてくれた。

助けてくれえ…レイ、アノン…

まったく、このおっさん意味わかんねえんだよ。

「よお、レイにアノンじゃネエか！久しぶりだな！」

え…？

「きよ、教官！？何でここにいますか！？」

なぜか、レイが焦っている。

「お、お久しぶりです。…」

アノンもタジタジだ。

「いやな、ちよつくらこの新米をお借りするわ。どんなもんだか、

見たいんでな。」

「し、しかし、依頼が…」

「依頼？それじゃあコイツの分はキャンセルしろ。」

「……ハア…わかりました。でも教官、あまり翔平君いじめない  
てくださいよ。軽めをお願いしますね…」

「おう、わかった。」

え、ちよつと待つて?…

レイ?何で認めちゃってんの?…  
てか、輕めって何!?

ギロツと教官は翔平を見た。

「さて、ちよつと眠つてもらおうか、新米君。」

そう言つて教官なる人物は翔平の腹を殴つた。

「…う!…」

意識が飛んだ。

…なんなんだよ…全員…

## 第九章：訓練所編「教官」

「ガハハハ！」

教官が笑っている。

大きなモンスターが飛んできた。

教官がモンスターに乗って追いかけてくる。

剣で切ろうとするが、抜いたとたんに剣は溶けた。

攻撃が飛んでくる。

盾を出した。

が、それも溶けていく。

いつの間にか防具も溶け始めた。

よく見ると指先も溶けてきた。

体全体が溶けていく。

「ガハハハハ、ガハハハハ！」

教官の笑い声だけが鳴り響き、やがて翔平の体は完全に溶けた……

ガバー！！

「ハア、ハア、ハア、ハア……」

翔平は跳ね起きた。

体中汗だくだ。

「なんだ、夢か……」

「どうした？悪夢でも見たか？新米。ガハハハハ！」  
聞き覚えのある笑い声。

翔平はとっさに振り向いた。

「どうした？そんなに俺がめずらしいか？」

「……………」

翔平は黙って教官をにらみつけた。

「おお、そうか、怒ってるんだな？デートを邪魔されたから…」  
「違います！」

翔平はきっぱりと言った。

（そもそもこのオヤジは非常識すぎる。もう誘拐に近いだろ。）

「まあいい。俺の目的はお前の実力を見ることだ。」

「ふざけないでください。そもそもあなたは誰なんですか!？」

「おお、そうだったな、悪かった悪かった。俺は訓練所の教官だ。名前はガロンという。ガロン教官とでも呼んでくれ。」

「…訓練所？」

「訓練所はな、ハンターを訓練する施設だ。実践形式でモンスター達とやりあってもらう場所だ。」

「そんな場所、用はないです。俺、レイ達と狩りの約束してるんで帰ります。」

「アホ、お前の分はとくにキャンセルされてるわ！」

翔平は正直、かなりむかむかしていた。

せつかく狩りができると思ったのに、このオヤジのせいでぶちこわしになった。

（もういい、すねた。何でも狩ってやる。いつそこのオヤジでも狩ってオヤジ狩りを…）

「ランポスだったよな？確か…」

いきなり教官が聞いてきた。

「そうですけど？」

「よし、ランポス討伐訓練でもするか？」

「!？」

今、確かに教官はランポスと言った。

「ランポスと実際にやりあってみるか!？」

翔平の怒りが急に晴れた。



「やります！やります！」

初めての狩りのターゲットになるはずだった、ランポスとご対面できるのだ。

さらに言えば、大きさ的にはあまり脅威ではないので、華麗に倒して教官を見返してやるという思惑もあった。

「よし、ではやるか。ついてこい」

翔平は近くにおいてあったハンターカリングを持って教官の後を追った。

しばらく歩くと、教官は大きな扉の前で立ち止まった。

「ここだ。この扉の向こうにまもなく三匹のランポスを放つ。中で待っていてくれ。」

そう言っただけで教官は扉を開けた。

翔平は気合いを入れて、扉の奥に入ってしまった。

## 第十章・訓練所編「実戦」

翔平は扉の中に入った。

そこは直径50mほどの広場だった。

周りは岩で囲まれ、扉以外からは脱出不可能な場所だ。闘技場と言ったところか。

ここだったら敵が逃げることもない、ハチの巣だ。

とその時、甲高い鳴き声が響き渡った。

直後に小型のモンスターが三匹、闘技場に飛び込んできた。

「来たな、ランポス。よしいっちょやってやるか！」

翔平は腰に掛けてあるハンターカリングを抜き出した。

「コイツの切れ味、試してやるぜ！」

そう言っただけで翔平はランポスの中の一匹に向かって突っ込んでいった。

翔平は剣を振り上げランポスめがけて振り下ろした。が、ランポスは軽々と翔平の斬撃を避けた。

（意外にすばしっこいな。）

翔平はもう一度剣を構え直し、再びランポスに飛びかかった。が、しかしその斬撃はランポスに届くことはなく、遮られた。気付けば、翔平は地面に仰向けに倒れていた。

何が起ったのか理解できずにいると、翔平の背中に痛みが走った。

背中に生ぬるい血の感触が広がる。

後ろから甲高い鳴き声が鳴り響いている。

そうだ、ランポスは全部で3匹いるんだ。

「くそ、少し引つかかれたか…」

翔平は素早く立ち上がった。

しかし剣が見あたらない。

「どこだ!？」

見ると剣は10mほど先の地面に刺さっている。

「うおおおお!!」

翔平は猛ダッシュした。

が、翔平の前には三匹のランポスが立ちはだかった。

「くっそお!どけエエ!」

翔平は叫びながら素手でランポス達をなぎ払った。

もう無我夢中で自分でも何をしているかわからなかった。

素早く剣をつかみ、素早く反転。

ひるんでいるランポスを思いっきり斬りつけた。

ランポスは吹っ飛び、動かなくなった。

ほかの二匹は攻撃される前に素早く翔平から飛び退いた。

「ギヤオ!ギヤオ!」

ランポスが甲高い声で吼える。

何か、話しているようにもみえる。

間

しばらくにらみ合った後、ランポスが仕掛けてきた。

「ギヤオ!」

一匹がジャンプして飛びかかってくる。

翔平はとっさに盾でガードした。

体に衝撃が伝わる。

が、それと同時に翔平の背中に激痛が走る。

「後ろか!？」

翔平は振り向きざまに思いっきり盾を振った。

盾はそのままランポスの頭部に当たった。

ランポスは頭を強打して気絶した。

そこを翔平は飛びかかり、瞬く間に気絶したランポスののど元を断ち切った。

「残り一匹いい!!」

翔平はものすごい剣幕で、最後ランポスに吼えた。

ランポスは怯えたように鳴き、後ろに飛び退いた。

しかし翔平は攻撃の手をゆるめなかった。

「死ねえええ!!」

翔平はそう言って剣を思いっきり投げた。

ブシャア!!

肉が切れる音が鳴り響き、最後のランポスは息絶えた。

「ハア、ハア、ハア…やった…」

そうつぶやいて翔平はその場に倒れ込んだ。

## 第十一章：訓練所編「夜空」

翔平はベッドから起きあがった。

外はもう暗かった。今日はここに泊まることになるだろう。

「俺、寝過ぎだなオイ……」

そんなことを言いながらベッドから降りる翔平。

「教官、どこにいるんだろ……」

翔平は訓練所内を歩き回った。

一通り探し終えたところで、翔平は上に続くハシゴを見つけた。  
翔平はそのハシゴを登って上をのぞいた。

ハシゴの上は屋根につながっていた。

外はもう真っ暗で、頭上には星空が広がっていた。

翔平は暗闇の中で、一人座って星空をながめる人影を見つけた。

「教官……？」

「おう、新米。」

やはり人影は教官だった。

翔平は教官のとなりに座った。

「何やってるんですか、教官。こんなところで……」

教官は少し苦笑しながら言った。

「なんかな、無性に星が見たくなってな……」

「はあ……」

「……実はな、この訓練所、ここ数年、訓練生が一人も来ていないんだよ。」

「はあ……」

一瞬、教官の顔がなんだかとても寂しそうに見えた。

「今どきの新人はな、やれ金だ報酬だと騒ぎ立て、技術などいらんなどと言って…訓練など、誰も受けようとはしないのだ。訓練など時間の無駄だ、とな。」

「……………」

「だから俺はな、新人が来ると聞いて、いても立つてもいられなくなっちまったんだ。」

「……はあ……」

「すまん。俺のわがままに付き合わせて…」

翔平は予想外の展開に少し困惑して、口を開けなかった。

教官はずっと一人で寂しかったのだろう。

孤独とは辛い。まして不器用な教官ならなおのことだろう。

翔平はやりきれない気持ちになった。

少しの間、二人の間に沈黙が訪れた。

「俺…今日思ってたんです…」

翔平が沈黙を破った。

「俺、全然弱くて、それで、あんなモンスター簡単に倒せると思ってて、でも、全然通用しなくて…」

それを聞いて教官が微笑んだ。

「そんなことはない。お前には充分素質がある。」

「そんなの気休めです！俺は弱いんです。実感したんです！」

教官は少し驚いた顔をした。たぶんこっちに來てから、翔平がこんなに強くものを言ったのは初めてだろう。

「俺、決めました。俺、訓練します。ここで！」

「…え？」

「訓練して、強くなって、それで訓練したから強くなったんだぞってみんなに自慢してやるんです！」

「…お前…」

教官はもう泣きそうだった。

「お前はいいヤツだ！さすがは俺の見込んだ男だ！」

教官はかなりうれしそうだった。

「さて、そうと決まったら早く寝るぞ！明日は厳しくいくからな！  
？ガハハハ！」

教官はえらく張り切ってハシゴを下りていつてしまった。

「…えらく単純だな。純粹というのか？」

翔平はそんなことをつぶやきながら、教官の後を追った。

## 第十二章：訓練所編「特訓」

次の日から、翔平の猛特訓が始まった。

「お前にはガードして踏ん張る力がない。ガードのコツを学べ！」  
「ハイ！教官！」

教官は重そうなボウガンを持ってきた。  
確かヘヴィボウガンという種類の武器だったはずだ。  
普通のボウガンよりも威力がかなり高い。

「えっと…それで何をするんですか…？」  
翔平がおそろおそろ尋ねた。

「コイツでお前をねらって撃つ。すべてガードしろ！」

「え…そんなのムリですよ」  
「うるさい！始めるぞ！」

教官は問答無用で弾を乱射してきた。  
おそらく弾の数からして「散弾」だろう。  
空中ではじける弾、いわばショットガンの弾のようなモノだ。

バババババン！

「ぐ…」

翔平のもつ盾をつたい、続けざまに衝撃が体に流れ込む。  
しびれてきた…

教官は六十発ほど散弾を撃ってから、ボウガンの照準を翔平から



おろした。

「さあて、次はさらに強力な散弾を使うぞ!？」

「え、ちよつと待ってくださいよ!俺、もう手がしびれて…」

「うるせえ!そんなの知るか!ガードしきれねえと死ぬぞ!？」

そう言うって教官は弾を素早く装填して再び乱射し始めた。

とまあ、こんな無茶な訓練が4時間も続いた。

しかし、苦勞した分だけ翔平には自信がついていた。

「しびれたけど…もうどんなモンスターの攻撃もガードできるような気がしまっす!」

「次は回避だ。回避はだな…」

夜、翔平はくたくたに疲れていた。

翔平は部屋の机に突っ伏していた。

「疲れた…」

そこへ教官が入ってきた。

「疲れたか?ん?」

「疲れました…かなり…」

「だがな、その苦勞の分だけお前は強くなっている。自信を持て。」

「…はい」

翔平は気のない返事を返した。

「今日の特訓でお前は大体基本をマスターした。明日はランポス討伐訓練だ。今日は早く寝ろ。」

「あ、ハイ！」

返事をして、翔平はベッドにダイブした。

そのまま翔平は吸い込まれるようにして眠りに落ちていった。

### 第十三章：訓練所編「脱走」

翔平は目覚めた。

外は薄暗く、分厚い雲が立ちこめている。とても静かで、聞こえる音と言ったらかすかに聞こえる雨の音だけだった。

「雨か：今日の訓練、ダイジョブかな…」

翔平はそんなことをつぶやきながらも、訓練をするための用意を始めた。

チェーンで編まれたベストを着て、その上から厚い鉄板の張り付いた防具を着る。手足にも鉄の防具を着用する。

最後に、ハンターカリンガのセットを背中に引っかけて、背伸びをした。

コンコン…コン…

ドアがたたかれた。

「どうぞ。…入ってください」

翔平は窓の外をながめながら言った。

しかし、いつになってもドアは開かない。

「何してるんですか？教官、入っていいですよ！？」

翔平はドアの方を向き、あきれた口調でいった。

コンコン…コン…

しかし、ドアは開かない。

ガリガリ…コン…ガリ…

今度はドアをひっかくような音がした。

「きょう…かん？」

翔平はおそろおそろドアに近き、耳を当てた。  
ガリガリ、ガリガリ、コンコン…

ひっかくような音は不規則に、そして断続的に続いた。

「なんだ？教官じゃないのか？…いったい何なんだ？」

翔平は片手をハンターカリングの柄にのばし、慎重に扉を開けた。

ギイイ…

ドアが鈍い音を立ててゆっくり開く。

ギヤアオ、ギヤアオ！

ドアを開いたとたん、いきなり甲高い鳴き声が響いた。

「！！ランポス！？」

翔平は素早くドアから飛び退いた。

まじまじとドア見つめ、自分の目を疑った。

そこにいたのは、紛れもなくランポスだった。

「くそ、何でいるんだよ！？化けて出たか！」

翔平はハンターカリングを引き抜き、構えた。

ランポスは翔平が構えるやいなや、飛びかかってきた。

翔平は盾でガード体制に入った。

その瞬間、翔平の頭に教官の言葉がよぎった。

『お前はもつと、思い切れ。思い切つてやれ！』

思い切つて、やる。

翔平は思いっきり盾を前につきだし、飛びかかってくるランポスにぶつけた。

翔平の予想外の行動に反応しきれず、ランポスは体勢を崩した。

「うおりゃあ！」

ハンターカリンガが大きく弧を描き、ランポスに振り下ろされる。  
ブシャー！

そのランポスは息絶えた。

「なんで…ランポスが？」

どう考えてもランポスがここにいるのはおかしい。

教官がしつかり檻の中に入れておいているハズ…！？

「教官！？そうだ！教官は！？」

翔平は勢いよく部屋から飛び出した。

「教官！教官！？どこですか！？」

辺りを見渡しながら薄暗い廊下を進む。

ババババン！

ふいに、どこからともなく聞き覚えのある音が聞こえた。  
「散弾？そうだ、教官の使ってたボウガンの散弾の音だ！」

ババババン！

近い。

おそらくこの近くの部屋から聞こえてくる。

翔平は周辺の部屋の名前が書いてあるプレートを見渡した。

「えっと…モンスター収監室！ここだ！」

翔平は直観的に判断してドアに駆け寄った。

ババババン！

確かに散弾の音はモンスター収監室から聞こえている。

翔平はハンターカリंगाを抜き、勢いよくドアを開けた。

ギヤオ！

またもや甲高い鳴き声。

前方にある檻には大量のランポスが入っていた。

檻の前で教官が散弾を乱射している。

「教官！コレはどうしたんですか！？」

翔平がそう叫ぶと教官はこちらに気付いた。

「檻のがぶつ壊れたんだよ。だからこのランポス達は全部殺さなきゃならん。」

「檻が…壊れた？…」

翔平は散弾を連射する教官のとなりまで行って、檻をまじまじと見つめた。

確かに檻の格子が8本くらい、ぐにやりと曲がって変形していた。

しかし、どう考えてもランポスのような小型モンスターにできる芸当ではない。

一体何が起こったのか。

「おい、翔平、闘技場に行ってくれ！おそらくこの檻を壊したモン

スターはそこへ行った！俺はコイツらを片づけるから、先に行って引きつけておいてくれ！」

「え……？モンスター？」

「そうだ、この檻を壊したモンスターは『空の王者』と呼ばれてるやつだ。こんなのが逃げ出したら大変なことになる！この村は終わりだ！だから早く！」

「……ハイ！わかりました！」

翔平は急いで、部屋を出ようとした。

「あ、そうだ翔平！」

教官が翔平を呼び止めた。

「言い忘れたが、ソイツは……」

## 第十四章：訓練所編「空の王者」

翔平は闘技場に続く廊下をダッシュしていた。

今まで通ってきた廊下はひどい状況だった。

天井や床の板が割れたりはがれたり、壁に大きな傷が付いていた。  
り。

ともかく、かなりの大きさと重量を兼ね備えた生物がここを通ったことは間違いない。

しかもかなりの強力な力を持った生物…

どうやら檻を壊したモンスターは訓練で使われるハズだったモンスターらしい。

『空の王者』

ホントに俺で大丈夫なのか…

翔平は不安でいっぱいだった。

そして教官が最後に言った言葉。

『言い忘れたがソイツは…炎ブレスを吐く。用心しろよ』

ブレス…一体それは何なのか。まあソイツが危険なモンスターなのはわかる。用心しなくては…

だんだん進むにつれて、廊下が明るくなってきた。かすかに風が吹いてくる。

風は本来入って来るはずがないのだが…

確かこの先には重い扉があって、闘技場へは簡単に入れないはずだ。

いくら力の強いモンスターとは言っても、あの扉は…



翔平の目に、前方から光が飛び込んできた。

…まさか！そんな！

翔平は目を疑った。

簡単には開かないはずの分厚い扉は破られていた。

鉄の扉はぐにやりと変形して、中心からぶち破られていた。

「くそ、やばそうだなこりゃ…」

翔平はハンターカリングを抜き、闘技場の中へ走っていった。

しかし、闘技場の中には何もいなかった。

あるのは砂地に残る大きな足跡くらいだった。

「あれ？…モンスターは？」

翔平が首をかしげていると、大きな影が頭上を通過した。

「え？」

翔平が空を見上げる。

そこには何かが飛んでいた。

かなりでかい。全身が赤い鱗でおおわれ、大きな翼で訓練所周辺を旋回している。

尻尾は先端がハンマーのように広がっていて、そこから大きなトゲが数本生えている。

危なねえな、アレは…

おそらくアレが教官の言っていたモンスターなのだろう。

…てか、

「空も飛ぶのかよ！そんなの聞いてねーよ！」  
思わず翔平は叫んだ。

空を旋回するモンスターが翔平をギロツとにらんだ。  
ヤバイ、気付かれた…

そのモンスターは急旋回して突っ込んできた。

「うあああああ！」

翔平は思いっきり訓練所の扉の向こう（もう扉はないのだが）へ  
ダイブした。

翔平が地面に着くのと同時に後ろでものすごい地響きと砂埃が巻き起こった。

そして後からものすごい風がすべてを吹き飛ばすように吹き荒れた。

すごい風圧だ。目を開けることすらできない。

やっと風が止まる。

翔平はさっきまで自分がいた場所を振り向いた。

「！！！！」

翔平は目を疑った。

さっきまで立っていた地面が深くえぐられ、クレーターのような  
大穴ができていた。

こんな攻撃を受けたらいつかの終わりだろう。

そして次に翔平の視界に入ったのは、大穴の向こう側に立っている怪物だった。

ソイツは真っ直ぐ翔平をにらんでいる。うかうかしていると吸い込まれそうな目をしている。

翔平の目の前にいる『空の王者』はとても静かな、そして威厳ある殺気を出していた

翔平は思わず見とれてしまった。

『空の王者』とはよく言ったモノだ。まさににびったりの名前だ。

ふと翔平は、ヤツの口元が赤くなり始めたのに気がついた。  
やがて口のまわりの空気がゆがみはじめ、かすかに炎の末端が見て取れた。

「まさか…炎のブレスってそのままの意味!？」

翔平が言ったのとはほぼ同時に王者の口から炎を帯びた塊が吐き出された。

「くそッ！なんだよこの世界！ありえねえ！」

翔平は盾を取りだし、身を盾の後ろに隠した。

ドゴオオン！

ものすごい衝撃が盾に伝わり、それと同時に高温の熱が翔平の全身を包み込む。

熱い…熱い熱い熱い!!

翔平は踏ん張りがきかなくなり、後ろへ吹っ飛ばされた。

「ぐっ！」

思いつきり背中を打って、吐血する。

「くそ、負けるかよ…」

翔平は口を押さえながら立ち上がりハンターカリングを持ち直した。

盾が少し溶けている。

おそらくもう、ガードは使い物にならないだろう。

翔平は覚悟を決めて走り出した。

（ぜってえ負けねえ。倒してやる…）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7285e/>

---

ハンターライフ～アナザー・ストーリー～

2010年10月10日14時26分発行